

第24回夏期特別集会（3）

信仰の神秘

――ガラテヤ書第3章23節～4章11節――

1977年8月20日（鹿沢）

小池辰雄

キリストの原始力 宇宙的なキリスト 無者 突破突入 南無キリスト イエス潔め給えり
信仰の神秘 キリストと一つにされる 最大の業は死 祈り

【ガラテヤ3】

23 信仰の出来らぬ前は、われら律法の下に守られて、後に踴れんとする信仰の時まで閉じ籠められたり。24 斯く信仰によりて我らの義とせられん為に、律法は我らをキリストに導く守役となれり。25 されど信仰の出来りし後は、我等もはや守役の下に居らず。26 汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。27 凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キリストを衣たるなり。28 今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隸も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。29 汝等もしキリストのものならば、アブラハムの裔にして約束に循える世嗣たるなり。

【ガラテヤ4】

1 われ言う、世嗣は全業の主なれども、成人とならぬ間は僕と異なることなく、2 父の定めし時の至るまでは後見者と家令との下にあり。3 斯のごとく我らも成人とならぬほどは、世の小学の下にありて僕たりしなり。4 然れど時満つるに及びては、神その御子を遣し、これを女より生まれしめ、律法の下に生まれしめ給えり。5 これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。6 斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。7 然れば最早なんじは僕にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神に由りて世嗣たるなり。

8 然れど汝ら神を知らざりし時は、その実神にあらざる神々に事えたり。9 今は神を知り、寧ろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小学に還りて、再びその僕たらんと為るか。10 汝らは日と月と季節と年とを守る。11 我は汝らの為に働かし事の或は無益にならんことを恐る。



●キリストの原始力

「信仰がまだ来ない前は、私たちは律法の下にあった」

と、ユダヤ人であるパウロが言いました。我々もまた、信仰の来ない前は、いわゆる道德の下に守られていた。これは、後に現れようとする信仰の時まで、そこに閉じ込められていた。律法の世界でどうにもならないと同じように、我々日本人も、この道德の世界でどうにもならなかったのです。

国が敗れて、「民主主義」というようなことになった。そうすると「社会、社会」というようなことでもって、「民主的社会」という言葉がお題目になってしまった。そして、結局その「デモクラシー」「民主主義」は、内容が全くからっぽの何か妙な類型的な、身勝手主義というようなことに現実になってしまっている。どういんですか、この日本の国は。まだ、律法の下にいた方がよかった。道德の中に守られている方がよかった。なおさら悪くなった。本当の民主主義、デモクラシーは信仰の土台の上にあるんです。それが無いので、どうにもならん。これは内村先生が既にそのことに気がついておられた。

「いわゆるデモクラシーではどうにもならんぞ」

と。それほど日本人は魂の世界で行くところを知らない。求めるものも知らない。ギデオンのいう会が聖書を蒔いています。けれども、それでも結局、この聖書の世界には入らない。今のキリスト教の世界が大体においてそうです。また、造反が出てきて、そしてもう、牧師さんに権威がない。ゴタゴタのありさま。あるいは形式的な礼拝ばかり。さつき司会者が

「なんと情けないふぬけであるか」

と絶叫したように、全くそのとおりです。

ところが、パウロがコリント前書1章で言っているように、

「26兄弟よ、召を蒙^{めしこうむ}れる汝らを見よ、肉によれる智^{かしこ}き者おおからず、能力ある者おおからず、貴きもの多からず。27されど神は智^{はすか}き者を辱しめんとて世の愚かなる者を選び、強き者を辱めんとて弱き者を選び、28有る者を亡さんとて世の卑しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。」

コリント前1・26(28)

この世の学者が何だと。パウロはこの世の学者のレベルからいっても凄い所にいたが、

「そんなものは塵芥^{ちりあくた}のごとく思う」

と言った。絶学[、]の学の世界にパウロは入った。私たちは、誰でもこれから戦わざるを得ない。アブラハムが神との問答で、

「五十人、この町に義人がいたら、赦してくださいますか」

と、段々、せりくだつて遂に十人まできた。

「それでも赦してやる」



と。あの問答はもつと遂に一人までいくべき問答なんです。

「二人でも義人がいましたら、赦してくださいますか」

と。神さまは

「よし、赦してやる」

と仰るにちがいない。私たちは、そのような「二人でも」という、その一人です。その「一」に宿るところのものがこの原始力なんです。物理の世界の原子力が強大であるのに対して、精神界はなんと情けない力であるか。私はそれ(原子力)を見ているうちに、こっち(原始力)に変わってしまった。

「原始の力、原始力とは何ぞや、キリストなり」

ということですよ。キリストが原始力だ、原始の力だ。力そのものなんだ。全世界の罪を負い、全世界に誰にでも自在に力を与え給うところの無量なるもの。まあ、何と言いますかね、このキリストというひとは。

自然界の太陽は、我々地上に生きとし生けるものにとって絶対的な存在です。ゲエテは、

「太陽に対して無条件に畏敬の念を払う。キリストに対してももちろん無条件に畏

敬の念を払う」

と、死ぬ二週間前に言いました。「ゲエテ、ゲエテ」なんて言って、ゲエテ研究は数え切れないほどあるけれども、そのようなゲエテの言葉が、彼の悲願が本当に受けとられているかと言いたい。結局、キリストに来てなければ、どんなことをやっても、どんなものも本物にならない。

●宇宙的なキリスト

「聖書は我につきて証しするなり」

とある。また、

「キリストの言ったり、為たりしたことはとても聖書には乗り切れない」

とある。キリストというのは宇宙的な存在ですから。クリスチャンが、やれ何々信仰だ、やれ何々教派だ、何々信条だと、何とケチくさいことを言っているか。私の言い方は少し乱暴だけれども。

どう言われたって、私は痛くも痒くもない。本当に宇宙的なキリストに私は圧倒されているから。こんな見るかげもない痩せ男だけれども、しょうがないです、原始力が来てしまっているから。「何をか!」というものが――人間的な「何をか」でない「何をか」が――私の中に在る。君たち一人一人の中に、本当にキリストの中に自分をぶち込んだ者の中に在るんです。

他の何ものとも、こんな事態が代えられるんですか。何を考えているんですか。就職問題が何だ。結婚問題が何だ。その中に悩んでいる人が、それだけの気魄を持たなければ、



本当に勝つことができない。

「キリストは何ものとも代えられない」

と本当に思っていますか。このような事態は本当に神秘と言おうか、奥義と言おうか、もう言いようがない。「信仰の神秘」と題したけれども、何も神学的なことを言おうとしているんじゃないですよ。そのようなキリストと本当に一つに、もう

「我がキリストか、キリストが我か」

というような、そういうところにパウロは来てしまった。ペテロもヨハネも来てしまった。だから、

「我を見よ」

と言った。本当にぶつつぶれている者が言えるんです、男でも女でも。

涙の下から本当の笑いが出てくる。大歓喜は、このようなキリストを持っている人でなければ出てこない。ベートーヴェンの「第九シンフォニー」も、ヘンデルの「メサイア」も、私たちの中に響いているところの音楽ならざる音楽にはかなわない。ベートーヴェン何ものぞと。それくらいなものがあるから、来るから、何でも掴めるんです。もちろん、彼らを私たちは芸術家としては尊敬します。そのことと、このような気魄を持っているということは何も矛盾しない。

私は今晚の時間が惜しくてしょうがない。あなた方が徹夜すると言うなら、私は徹夜するよ。けれども、一時間でも、三十分でも、本当にその世界に入れば——いや、一分でも一刻でもいい——それで、「アーメン・ハレルヤ！」なんです。時間の長短は問題でない。

●無者

パウロは愉快だね。コリント前書1章に、

「²⁷されど神は^{はずか}智き者を辱しめんとて世の愚かなる者を選び、強き者を辱めん

とて弱き者を選び、²⁸有る者を亡さんとて世の卑しきもの、軽んぜらる者、

すなわち無きが如き者を選び給えり。」(コリント前1・27～28)

とある。

「無きが如き者」

ではない、これは無き者、

「無者」

です。ニーチェが言った「一切の価値の転倒」です。こういう者たちがむしろ選ばれて本当の神の国を継ぐんだ。

あなた方のうちに、なかなかやつかいな病いをもっている方もあるし、いろいろな事でお困りの方があることを私は知っています。

「祈ってください」



と言われる。幾人かさつきいらつしやいました。キリストは、跛者とか、目の見えない方とか、いろいろな病の者を最も愛して、相手になさった。

「天国はそういうものによって作られていく」

と。キリストの他は、他のものは要らんと云う者が本当に天国をつくっていく。また、この世において本当の歩き方をする。私たちは祈ってあげて――私の祈りが何かなんて思っ
てません――上から来るところの力が、キリストが、今入っていらいっしやるということを確信しているだけです。どの医者も治すことのできないような病氣を持っていたても、一切の病を癒し、死人をも甦えらせるキリストがあなたの中にいれば、もはや問題はない。どうせ、みんな死ぬんだよ。けれども、

「死んでも死なないものが来ているかどうか」

だけが問題なんです。私は「信仰」なんていう言葉も使いたくないくらいです。即現実であります。

みんな今、どこに居るんですか。空気に包まれ、空気の中に、空気を吸っているでしょ。我々は空気と離れることができますか。空気だとか、天気だとか――これは天の気だよ、いわゆる天気じゃない――肉体は空気と離れることができない。私たちの魂は神の霊気、神氣と離れることができなくなっている。これと離れているから、いつまでたつてもどうにもならん。魂がはつきりそのことを証明している。魂は神気を吸っていなければダメだということを、誰でも偽りなく証明している。しかしながら、

「神気を吸っていれば何がどうなつても大丈夫だ」

とはつきり、魂が告白できるんです。これは本当です。空気に囲まれ、空気を吸っているように、私たちは神気に囲まれ、神気を吸っている。御霊の世界がそれである。御霊を本当に吸う。

その事態を開示してくださったのがキリストの十字架である。魂が本当に贖われて開放されて、楽にキリストの気を吸う。キリストの気の中にある。これが聖霊の世界です。その場をつくつてくださったのが、このキリストの十字架です。でなければ、なぜ、キリストは十字架に懸かつたんですか。いきなり、キリストは天界へ行きたかった。行けたんです、エリヤよりもつと凄く。けれども、ゲッセマネの祈りで、

「お前は、この世の罪を負う。旧約の宗教を満たして、これを破つてしまえ。廃棄してしまえ」

と、これがキリストの十字架である。「神の羔こひつじ」とはそのことです。そうしたら、キリストの血、キリストの肉、霊体、この霊的具体的なもの came 来た。

そういう事態が信仰の――神秘ではない、信仰の神秘は実は――最も凄い現実である。「神秘」なんていう言葉を使うものだから、

「何か、どうも、神秘の世界はわかりません」



なんて思う。そうじゃない。一番わかりやすいものだ。空気を吸っているように、魂がキリストの気を吸う。

十字架で砕かれていることに気がつくだけのほなしです。気がつくだけ。

「まだ砕かれませんか」

ではありません。

「あなたは既に砕かれていますよ」

ということ。罪は無くなってしまうているんです。いくら悪い事をしたって、贖われてい
るから、悪いことをしたならば、

「申し訳ありませんでした」

と平伏せ。そうしたらば、贖われていることに更に深く気がついて、その中に入っていく。
どうせ、人間は躓いたり転んだりする。何をくよくよしているか。ルターが

「大胆に罪を犯せ。しかし、より大胆にキリストを信ぜよ」

と言った。これは躓くような烈しい言葉です。言葉というのは、その気魄を受けとらな
ければダメですよ。キリストの譬え話だって、みなそうなんです。それだから、私は、

「いわゆる意味ではありませんよ」

と言っている。その現実の中に自分が本当に溶け込んでしまっているんです。海の水を見て、
誰が塩辛いと思うか。どこに塩があるか。舐めてみたら塩辛い、塩の姿はない。そ
のように、溶け込んでしまっている。

宗教臭くないんです。臭みがない。キリストほど「神然」たるものはない。自然が神然
たるものです。「靈然神然」というような言葉が自然にでてくるんだ、私は、楽しいから。
昔の人が作らなくなつて、真理が開示してくれば、作つたていいじゃないか。何も作つ
ていのではない。産まれてくる、自然に出てくる。聖霊の世界は本当に何とも説明でき
ない。創造的なことになってくる。

●突破突入

では、ガラテヤ書3章26節から入ります。

²⁶ 汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。

「キリスト・イエスに在る」という、そういう信仰によって、みな神の子である。

「キリスト・イエスに在る」

ということが、信仰なんですよ。ギリシア語の本当の読み方になると、そういうことです。
その「キリスト・イエスに在る」という、「の中に」「イン」「エン」ということ。ただ一つ

「エン・クリスト」

という言葉だけをギリシア語で覚えてください。ギリシア語で「エン・クリスト」、英語で「イ
ン・クライスト」、ドイツ語でも「エン・クリスト」という。



「私はたった一つのギリシア語しか知りません。それは、エン・クリストです」と。いいよ、それで。それでたくさんだ。

「クリストの中に」

ということ。もうひとつ言うと、

「クリストと一つ」

ということ。ヨハネ伝の

「我と父とは一つなり」

という言葉は聖書の中で一番短い句です、たった三字です。「一」の世界です。

「クリスト・イエスに在るという信仰によって、信において、みな神の子である」

と。全くその通りです。そうでなければ、「クリストの中」にいなければ、神の子ではない。それでは、どこから入っていったか。

「十字架という門」

から入ってきた。十字架という門から中へ入っていく。直接には入れませんよ。直接に入つて、いい気になっているという、ヘタすると、サタンと切り替わる。クリストの

「我は門なり」

という言葉は、

「我は門なり。我が十字架という門をくぐって行けば、その先は聖霊の世界だぞ」

ということです。そこは詩篇23篇のごとき、緑の牧場、憩いの水汀、^{みぎわ}そういう天国的な所です。そこに吹く風は天つ霊風である。

27 凡そバプテスマに由りてクリストに合ひし汝らは、クリストを衣^きたるなり。

「およそクリストへのバプテスマを受けた汝らはクリストを着たるなり」

ということ。クリストの中へ入っていく、そういうバプテスマを受けたところの汝らはクリストを着たのである。天衣無縫のクリストを着る。

「クリストを着る」

とは霊^い体^{てい}を着ること。御霊の体を着たことになる、この幕屋の上に。あるいは中から。

28 今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝

らは皆クリスト・イエスに在りて一体なり。

今や汝らはクリスト・イエスに在りて一つである。どこ人ということもない。男も女もなければ、奴隷も自主もない。パウロの言い方は突き抜けているね。「ない」ということは、それは「ある」んです、みんなその区別は。

「あるけれども、そんな区別はもはや問題でない世界であるぞ」

ということですよ。

「男と女がなくなつて中性になつたか」

と、そうじゃないよ。みんなそれぞれあるけれども、そんな「ある」ということがもはや



問題でないところの、一つの世界に入ってしまったということ。これはいわゆる全体主義ではないですよ。

「聖霊に在っては、神・キリスト・我は一体なり」

と、これが絶対恩寵の世界なんです。絶対恩寵の現実であって、生の現実ではない。

「二体になって、俺は偉くなった」

なんて、冗談言うなど。どこまでも絶対恩寵の現実であります。こちら側からいえば、信仰の現実ですが、しかし、恩寵の現実の方がいい。本願の現実なんですから。どこまでも上から来ている。太陽は下から照っているかね、上から照っている。物理学的には上だか下だかわからないよ。けれども、我々が見る世界では、太陽の光は上から来ている。地面からやって来やしない。そして、キリストの光はこれを貫くんです、太陽の光と違って。宇宙線も貫いているようだが、キリストの光は私たちを照らしました照破している。照らし破ってくる。聖霊となって突破してくる。私たちが突破するのではない。

「聖霊が突破突入する」

と、私は『無者キリスト』にも書きました。御霊に突破突入されるんです。そして、もう浸透している。その事実を十字架がやってくださっている。なぜ、この事実を否定するんですか。どこへ行くこうとするんですか、十字架なしに。どこかへ行つて、おさまるのなら、おさまってみてくださいよね。パウロはひっくり返されて、そして、アラビヤの曠野で瞑想し祈ったら、本当に十字架が出てきた。

キリストに在っては、全部それが一体の中に入つて、それぞれの部分が完全に有機体的になっている。有機体的な一体なんです。

●南無キリスト

では、ガラテヤ書4章5節から。

5 これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。

御子をつかわしてね、時が満ちましたから。

6 斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。

「キリストによつて神の子とされたが故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して」

と。これはもうはつきり、キリストが約束されたとおり、贖いの後には聖霊がやってくる。「アバ」はアラミ語で「父」ということ。

「お父さまー！」

「主さまー！」

と、どう叫んでもいいですよ。「主さま」と言つたときに、その背後には「お父さま」がある。



「お父さま」と言ったときには、その前方に「主さま」がある。どういう祈り方をしたって、その祈り方はどうでもいいです。そこはもうちゃんと重なっているんだから。

「南無キリスト」

と私は言いました。この「南無」は、帰入する、帰り入る、祈り入ること。

「南無キリストさまー!」

と言つて、キリストの中に、叫ぶと同時に入ってしまったている。なぜ、入れるんですか。十字架の門がもうちゃんと開いているから。そしてもう、御霊の世界に即、入ってしまうから。十字架即御霊というようなくあいに、寸分ずれのない世界に入るから、ありがたくてしょうがない。沈黙の雄叫びです。

あなた方、バカみたいな顔していいよ。けれども、魂は南無キリストの現実の中にいる。それでいいんです。その現実の中で祈る。祈っていて、ただこっち側から祈って熱っぽく迫ったってダメだよ。ダメとは言わないけれども、それではくたびれてしまう。

「もう来てますよ」

と。ということは、全存在を投げうって、本当にその中に入っていれば、その中で祈ってしまうんです、今度は中で。中で祈っているから、もうみんな現実の力強い祈りになっている。

●イエス潔め給えり

讃美歌を歌っていると、よく「ししたまえ」とか、「ししたまわん」なんてあるが、それでは気がぬけてしまう。たとえば、さつき歌った讃美歌271番「いさおなき我を」もそうだ。

1 いさおなき我を 血をもて贖い、

イエス招き給^{たま}う、み許にわれゆく。

これはいいです。

2 つみとがの汚れ 洗うによしなし、

イエス潔め給^{たま}う、み許にわれゆく。

「イエス潔め給^{たま}う」でもいいけれども、これは「イエス潔め給えり」です。現在完了です。潔めたもうたから、私はみ許に行くのです。「潔め給^{たま}うが故に行く」というのもひとつの真理の一面ですけども、その真理の奥の世界は、

「潔め給えり。だから、私は参ります」

ということ。

「救われているから、いよいよ励め」

ということと同じなんです。

4 こころの痛手に 悩めるこの身を

イエス医^いし給^{たま}う、み許にわれゆく。



ここも「イエス医し給^{えり}」です。これは「給^{わん}」でなくて、「給^う」だからまだいいけれども、もつといいのは「給^{えり}」なんです。

5 たよりゆく者に 救いといのちを、

イエス誓い給^う、み許にわれゆく。

ここも「イエス誓い給^{えり}」です。全部、

「事実の根底の裏付けがあるから、私は安心して、平安の心をもってみ許に行く」ということ。

6 いさおなき我を かくまで憐み

イエス愛し給^う、み許にわれゆく。

「イエス愛し給^{えり}、み許にわれゆく」

ということ。なにも、この讚美歌にケチをつけているのではない。これも結構ですけれども、もうひとつその奥があるということに気がついていただきたい。私はそういう現実にいなければ、やりきれない男なんです。申し訳ないね、皆さんはもつと品がいいかもしれないが。あなた方、水はH₂Oであるということが分かって、渇きがなおるんですか。水は本当に飲まなくては、渇きはなおらない。

ガラテヤ書4章19節に、

「¹⁹わが^{おきな}幼兒よ、汝^{うち}らの衷^{うち}にキリストの形成るまでは、我^{うみ}ふたび^{くるしみ}産^{うみ}の苦痛をなす。」(ガラテヤ4・19)

とある。「幼兒よ」というのは、靈的に幼いからそう言った。この句はパウロの呻きです。本当にキリストがあなた方の中に宿り給うまでは、呻きをもつて執り成し、祈らざるを得ない、語らざるを得ないという。

●信仰の神秘

信仰の神秘で一番大事なのは祈りであります。祈りの一番の姿勢は、言葉で祈るのではない、身体^{からだ}で祈るんです。身体をキリストの中に入れることが祈りなんです。「主さま!」と叫ぶと同時に身体が入ってしまっている。ルターがあるところで、

「信仰は行為である」

とまで言ったところがあるので、私は驚いた。

「信ずるとは行ずることである」

と、私がいつか言った言葉と同じようなことを言っている。内的行為である。

「信仰のみ」

と言っているルターがまるで反対のようなことを叫んでいる。

これはルターの言葉ですが、皆さんに紹介しておきましょう。

「一度殺された上は、更に律法以上に甦^{よみがえ}らせられ



律法で殺されたから、今度は律法以上に甦らしめられ、

畏るるなかれ、わが律法を汝に与え汝を殺したるは、死の中に汝を閉じ込めんがためにあらず、汝が我を畏れて生くることを得んがためである、との神の声を聞くことを得んがためであつた。自己の善行と義を主張する心は神を畏るるの心と両立しない。しかして、神を畏るる心なき所には、恩恵と生命に対する渴望はあり得ないのである。その故に、神は強き鉄槌をもってこの岩を砕き、天空に燃ゆる熱火をもってこの山を覆^{くつがえ}さなければならぬ。換言すれば、この猛悪頑固な獣

というのは人間の中の罪なる思い

これを殺してしまわなければならぬ。しかして、この破壊と殺戮^{さつりく}とによって、人が無に帰し終りたる時に、人は遂に自己の力、義、生につきて失望し、かくして全く恐怖の中に陥つたときに初めて、恩恵と罪の赦しを渴望するに至るのである。」

これはルターの

「いかにして神の前に義たるか」

という体験でぶつ倒れたことの告白なんです。

「その律法に自分は死んだら、もの凄い恩寵の世界に、赦しの世界に入れられた」

ということ、パウロのこの言葉に借りて説明しているところがあつたから、ちよつと今、後もどりでしたけれども、紹介したわけです。

それから27節の、

「キリストへのバプテスマを受ける」

というところについても、

「神の憐れみによりて更生の洗いと、我らの救主イエス・キリストをもて豊かに注ぎ給う聖霊による維新とにて我らを救い給えり、

これはテトス書の言葉をここに持つてきたわけだね。

と言えるが如くである。バプテスマを受けたる者はただに更生し、聖霊によりて天的の義を新たに受け、永遠の生命を得るのみならず、また彼らの中に新たな光と炎とが起こり、新たな潔き熱情が起こり、神を畏るるの心、真の信仰、確実なる希望が起こるのである。また、彼らのうちに新しき意志が起こり始めるのである。これ即ち、福音的にキリストを着ることである。」

と、ルターはそういうように言っております。まことに、いわゆる解釈ではない。彼も情熱を傾けて、上からの熱でもつて告白しているような解説です。

あとは、ハガルとサラのことを例えて言っているところがありますが、ここで言うことは止めます。

問題は、「信仰の神秘」ということは実は最も深い現^{うつ}の世界であるということです。「一つ」の世界です。一如の世界がそのようにして、私たちに十字架と聖霊によって本当の現実に



なつたときに、これが信である。

●キリストと一つにされる

今、私たちはこれから祈りの世界に入るわけですが、祈りの世界で、

「わがうちなるキリストよ!」

と叫び入り、このキリストと本当に一つにされることです。ゲートルが、

「人間の信仰にはいろいろな型がある。民族信仰は上なる神々に対する畏敬の念である。哲学的な信仰は、自分と同等なるもの、何か偉大なるものに対する畏敬の念である。しかし、キリスト教は我よりも下なるものに対する畏敬の念である。」

と言った。「下なる者」というのは、「僕の姿」をとったキリストのことを言うわけです。また、このような僕の姿にあるところの本当のキリスト者のことです。ルターも

「一切のものに仕える」

ということ『クリスチャンの自由』で言っていますが。それから、

「最後に、わが内なるものに対する畏敬の念である」

ということゲートルが言った。けれども、ゲートルはその時に聖霊のことは語っていない。

「わが内に宿り給うところの御霊のキリストに対する畏敬の念が、これが最後のことである」

ということ。そして、

「この四つは常に循環して存在する」

というようなことを彼は言っている。

一切のものに貫在し、超在し、至るところに遍在し、また、私たちの内に内在し給うところのこのキリスト。このことはパウロがエペソ書で言っています。そういう世界に、祈りの世界では自在に入れるんです。

そうしたら、そこから、その場から、その内なる世界に於て祈るときに、祈りが本当に力をもつ。そして、その祈りは人を救うことができるところの力をもっている。それは、祈られている人は知らんかもしれないけれども、それが力を及ぼしていく。だから、キリストが、何マイルか先にいる病人に

「既に癒えたり」

と言われた。もうキリストはそれをバーツと言ってしまったているわけだ。神さまの御意がもうたちまち霊的に働いてしまっている。

私たちは、とにかく、この使徒たちの次元に本当に入っていききたい。もうそういうことになったら、恐いものはない。何と言われようと、どんなにこつちが小さいようなものであっても、どつこい、そこに無限大のものが質的に来ているから、「何をか」というものがある。人数が多いことは何も要らん。



「本ものであること。本ものが来ているか」
ということだけが問題なんです。

●最大の業は死

私の兄貴が、

「親戚、身内の者に、救われた者がたつた私一人でないことを祈る」

と聖書の扉に書いた。私はこの扉の兄貴の字を見て、もう胸がつまった。そして、

「私はとにかく、兄さん、救われました。このような奴を通して本当にキリストの友だちができてきました。うれしいです」

と。みんな神さまが、キリストがなしたもうところの、神の国の前進なんです。皆さん一人一人がそうです。最大の業は死なんです。

とにかく、皆さん一人一人は、死が本当に生きてくるんです。キリストを生きて死んだ死は最も強烈な伝道になる。パウロたちのこの殉教の死が、ステパノの殉教の死が――何も殉教を言っているわけではないけれども――それは死で終わってない。向こう側に往つて、そつちからまた力が来るんだから。アブラハムもイサクもヤコブも生きていたという。歴代の使徒たちは、聖徒たちは生きている。天の万軍がある。私の現実は、こんな地上の次元ではない。絶対次元の世界です。絶対次元の世界だから、こういう聖書の使徒たちはみな天界の友だちなんだ。こんな味方がいて、他に味方がいますかね。パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん、ヤコブさんなんていう味方がいる。キリストは――キリストさんとは言えない――「キリストさま」です。イエスさまは私たちの救い主なんだから。これは友だちというわけにはいかない。

皆さん、過去・現在・未来を本当に掌握しているところの永遠の現在というものを、地上において既に天国を歩いているようなことに、キリストを内にいただいて

「われキリストの中に、キリストわが中に」

ということになったならば、もはや問題はない。祈りはその世界に入ることです。それが信仰の神秘のキー、鍵なんです。祈りなくして信仰はない。しかも、祈りは、聖霊の祈りが上からやって来ている。祈らしめられる。

「我らは如何に祈るべきかを知らざれども、聖霊言ひ難き呻きをもって執り成し給う」

と。いいねえ、あの言葉は。ローマ書8章26節です。あの言葉は、私の兄貴も好きだったとみえて、布に英語で書いて聖書に挟んであったのを、私は額にしてしまった。

U君が祈っていて、異言が来てしょうがない。それをノートに書いたら、パウロの呻きがそこに響いているのが出てきた。

「日本は滅びるぞ。世界は危ないぞ。今、悔い改めろ」



と、三度ばかり叫んでいるような言葉があの中にある。

いいですか、皆さん。そのように、私たちはキリストに顧みられている人間ですぞ。どこを見ているんですか。キリストの他に見るところはない。

「主さまはそのように顧みて、そのように愛惜してくださるか。よし、何がどうなっても構わん。人に何と言われようと、どう思われようと構わん。生涯を本当に証し人として生きて行こう」

ということになる。

「我が証し人たれ」

と、キリストの本願はこれだけです。

十字架を瞑想して、十字架の門から入って行くんですよ。そこに自分はいたと。ある人がさっき私の部屋に来て聞いた、

「私は坐禅をしていたんで、つい、坐禅のことが気にかかって、なかなか祈りに入れません」

と。私は、

「そうかい。坐禅して坐っている時にキリストの懷の中に坐っていると思いなさい」と言った。詩篇139篇に

「何処にいて汝の御前を離れんや」

とある。神さまに追跡されている。神さまに捕まえられている。神さまに引つ張り回されている。太陽が地球を引つ張り回し、光熱を与えているのと同じこと。もつと凄い現実なんだ(異言)。そういう現実の中に私たちは入れられているということに豁然として気がつかなくて。もう言うことはないですよ。その中にいるんですよ、皆さん。そこで祈っているんですよ。

「神さま、キリストさま、来てください」
ではない。

「もう、私はいるじゃないか、お前の中に」

と。何を考えているんですか。私たちに開示してくださった十字架はそんなに虚しいんですか。

「お前は、精神が分裂していようが、頑くなであろうが、私は徹底的にそれをみんな贖い取ってしまったんだ。何を考えているんだ」

「はいっ、ありがとうございます」

と、その他に何が言えるんですか。

● 祈り

祈ります。



このダメな私たち一人一人をどん底から荷ない、徹底的に贖い取ってくださった主さま。感謝いたします。あなたの中に私たちは空気に包まれているように抱かれています。ありがとうございます。こんなダメな奴を、主さま、本当にあなたの絶対御恩寵の中に入れてくださった、ありがとうございます。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

と御霊をもつて語ってください、主さま、ありがとうございます。私たちは何も自分ではできませんが、しかし、

「我によれば何ごとをも為し能う」

と、感謝いたします。主さま、あなたの御力が働き、私たちをして、どうぞ、あなたのご本願を聞かしてください。そして、それを本当に受けとり、僕として、また、あなたの子として私たちは進んでまいります。

この兄弟姉妹たちはいろいろな悩みや苦しみや問題をもっていますが、あなたはそれを全部、根底から解決していらっしゃるのです。あなたの所に行けば、それは私たちの解決以上の解決が待っていることを信じております。

かくして、行き詰まるところの事態が実は最も素晴らしいあなたの懐であることに気がつきました。ありがとうございます。もう私たちは行きつまりをしりません。そのようにして、一人一人は本当にその中に入っていきます。あなたの御名を讃え奉ります。

……

はいっ、祈りを静めてください。みんな、深く沈黙で祈りをしてください。深く。己を吐き出して、キリストの霊気を吸うような気持で、呼吸をしなさい。肉体は空気を吸うが、魂は霊気を吸う。御霊の世界です。

「風は何処より来たり何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者も斯く

のごとし」

とキリストが言われたように。福音書のキリストを眼前に髻ぼうふつとして、そのキリストのドラマの中に自分を入れていく。その意味で福音書はよく読まなければダメです。主さまの深い顧みは、私たちの中に本当に入り、また包み、抱き、とまってください。そして、その力はあなた方を通して展開していく。まず、キリストの中に入ることです。

……主さま、今ここにある魂が一人残らず、本当に魂のどん底からあなたに感謝し、御名を讃えているこの姿の故に、御名の故に、ただ感謝し、ただ御名を讃え奉ります。

どうぞ、あなたのご栄光が一人一人を十全に包み、また貫いてください。また、私たちは今晚、安らかにあなたの御懷に安らい、明日をまた迎え、最後の集会でその凱歌を上げて、散じたく存じております。

心からの、言い尽くし難き感謝と讃美と祈り、魂のどん底から御名により捧げ奉る。アーメン

